

実施報告書

10月26日（日）

明治学院大学白金キャンパス 本館北ウイング1251・1255教室

- 10:00 開会・会長挨拶 藤田幸久氏 国際IC日本協会会長
TBS報道特集のMRA/IC活動記録放映 国際IC活動と日本IC協会の歩み
- 10:40 李柱榮（イ・ジュヨン）氏 MRA/IC韓国本部総裁・元国会副議長
- 11:10 岡本あんな氏 共同通信グループNNA韓国編集記者・国際IC日本協会理事
- 11:50 田中好子氏 パレスチナ子供のキャンペーン 事務局長
- 13:50 特別講演 吉田ゆかり氏
防衛大学校女子一期生、一等空佐、航空自衛隊幹部学校 主任教官
- 14:50 グループ・ディスカッション
「次世代に繋げる平和への道」 あなたは国をどのように守りますか？
- 16:20 グループ発表

10月27日（月）

衆議院第一議員会館 国際会議室

- 10:00 開会・会長挨拶 藤田幸久氏 国際IC日本協会会長
- 10:30 李柱榮（イ・ジュヨン）氏 MRA/IC韓国本部総裁・元国会副議長
- 11:15 矢野弘典氏 経済人コー円卓会議日本委員会会長・国際IC日本協会名誉会長
- 13:30 有光健氏 戦後補償ネットワーク世話人代表
(早稲田大学国際和解学研究所招聘研究員)
- 14:45 中曽根弘文氏 国際IC推進議員連盟会長 (元外務大臣、元文部大臣)
- 15:30 パネル・ディスカッション 司会：藤田幸久氏
次世代に繋げる平和への道 ～国際IC日本協会の歩みとこれから～



矢野弘典氏 経済人コー円卓会議日本委員会会長・国際IC日本協会名誉会長

和解と信頼の掛け橋

矢野弘典氏は、幼少期に母と兄とともに水戸空襲を経験し、母に命を救われた体験を語った。母が桑畑の土を掘って煙から守った行為や、兄の記憶との対比を通じ、戦争の恐怖が子どもに与える影響を述べた。この出来事が「子どもに同じ思いをさせたくない」という平和への原点になったと説明した。また、父が抑留体験を通じて「中国人は大人だ」と語ったことを紹介し、その言葉が後年の中国古典への関心につながったと述べた。戦後、フィリピン代表から戦争責任を問われた際には、「時は癒やす」という対話を通じて相互理解の重要性を実感したと説明した。

次に、MRA/ICの歴史を振り返り、戦後の復興期に希望を与えた活動として位置づけた。自身は1976年の第1回東京国際フォーラムでMRAに出会い、ブックマン博士の「静かな時間」や「四つの道徳基準」に共鳴したと述べた。初代会長・土光敏夫氏の「無私」の実践を紹介し、人格形成と社会改革を結びつけた姿勢を評価した。

最後に、MRA/ICの原点回帰と人的ネットワークの拡充を提唱し、「教育」を次世代への平和構築の要と位置づけた。倫理観と才能を兼ね備えたリーダー育成の重要性を指摘し、「才徳兼備の人材こそが信頼される社会をつくる鍵である」と述べた。



李柱榮（イ・ジュヨン）氏 MRA/IC韓国本部総裁（元国会副議長）

IC（MRA）運動を支援する国際的奉仕組織の提案

李柱榮総裁は、韓国MRA/ICを代表し、運動の再興に向けた新たな組織構想を述べた。まず、MRA運動の歴史を振り返り、1938年にブックマン博士が提唱した「良心と道徳の再武装」による平和構築の理念が、戦後の欧州和解に寄与したことを説明した。また、韓国では1960年代以降、青少年を中心に「誠実・純潔・無私・愛」を実践する運動として広がり、民主化と産業化に貢献したと述べた。

李総裁自身も1968年に高校でMRAクラブを設立し、その経験から「変化・挑戦・自信」の三つの精神を生涯の指針としたと述べた。政治家としては海洋水産省長官時代のセウォル号事故の際、4か月間命がけで遺体収容作業に当たったことを通じて、MRA精神の誠実さが社会に認められた事例を紹介した。

しかし近年、韓国におけるMRA活動の縮小と道徳的基盤の弱体化を指摘し、再活性化のための新たな枠組みとして地域単位の「MRA支援クラブ」設立を提案した。これをロータリークラブなど国際奉仕団体のモデルに倣い、地域密着・国際連携・持続可能な運営を目指すとして説明した。現在、韓国内で複数地域に設立準備を進めており、成功事例を国際展開に生かす方針を示した。



吉田ゆかり氏 防衛大学校女子一期生、一等空佐、 航空自衛隊幹部学校 主任教官

安全保障分野にも必要なジェンダー視点と多様性

吉田氏は、防衛大学校卒業後、航空自衛隊に入隊し、航空幕僚監部災害派遣班長、航空幕僚幹部広報室長や防衛研究所主任研究官など多種多様な職歴について自己紹介した。

講演では、まず航空自衛隊の概要を説明し、「空」を主たる領域として国の防衛等の任務を担う唯一の組織であると述べた。そして、2015年に航空自衛隊の全職種で女性配置制限を撤廃したこと等を例に挙げ、航空自衛隊の男女共同参画推進の取組状況を示した。

続いて「ジェンダーとは何か」をテーマに、生物学的な性別（セックス）と社会的・文化的に形成された性別（ジェンダー）の違いを明確化し、固定的な性別役割分担意識や無意識の偏見が個人や組織の意思決定に影響する危険性を説明した。さらに、多様性（ダイバーシティ）は各属性のそれぞれの違いに優劣がなく、組織の問題解決力や創造性を高めるものであると指摘した。

また、国連安保理決議1325号に基づく「女性・平和・安全保障（WPS）」の理念を紹介し、ジェンダー視点を安全保障分野、自衛隊の各種活動の現場に取り入れる意義を説明した。

具体例として、災害派遣活動における性別・年齢等のジェンダー視点を反映した支援体制や広報活動におけるジェンダー表象の改善を挙げた。

最後に、ジェンダー視点の反映と多様性の推進は作戦効率を向上させるとともに、人材確保、組織の信頼性・価値向上につながるとし、正しい理解とリーダーシップ、人材育成が不可欠であると述べた。以上を通じ、自衛隊における多様性の意義と課題を体系的に示した。



田中好子氏 特定非営利活動法人パレスチナ子供のキャンペーン事務局長

ガザは今

田中氏は、認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン（CCP Japan）が、1986年に設立され、中東地域での難民支援や人道支援、アドボカシー活動を行っていることを説明した。

2023年10月以降もガザ地区で給水、炊き出し、食料・物資配布、保健支援、子ども支援などの緊急支援を継続していると述べた。給水活動は12～15か所で1日70～100トン、炊き出しは毎日850食以上を提供しており、米やパスタのみでも中断せず続けていると示した。

また、昨年（2022年）の第46回IC国際フォーラムに出席したパレスチナとイスラエルの参加者から現地の実情を学んだと披露して、クリニックによる保健支援、障がい児を含む2000人以上への教育・心理的支援も実施していると説明した。現地職員による報告として、家屋の破壊や飢餓、障がい者の増加など、深刻な被害状況を紹介した。

さらに、トランプ政権による和平提案の背景や、イスラエル・米国・EU諸国の動向を踏まえ、二国家解決の必要性を指摘した。最後に、国際IC日本協会に対し、日本政府による人道支援と外交的関与、二民族共存への働きかけを求めた。



有光健氏 戦後補償ネットワーク世話人代表 早稲田大学国際和解学研究所招聘研究員

「戦後80年」・残された戦争犠牲と歴史について考える

有光氏は、戦後80年の節目において日本社会がいまだに抱える戦争被害・戦後処理問題を整理し、その現状と課題を報告した。まず、戦争体験者の減少とともに「記憶の風化」が進む中で、アジアの被害者視点が大きく後退し、加害の実相が見えにくくなっていると指摘した。日本政府・企業に対しては、多岐に渡る戦時性被害の訴えが続いているとし、具体的な和解事例を挙げた上で、多くの未解決問題があるとの見方を説明した。

続いて、日本政府の対応が「謝罪・補償」ではなく「援護」中心であるとし、国内外の被害者への支援措置や基金の例を整理した。また、諸外国では国家が人道的立場から個人補償を実施しており、米国やドイツなどの事例を比較対象として示した。

さらに、問題の背景として冷戦構造の崩壊や国際人権意識の高まりを挙げ、被害者が求めているのは「事実の認定」「謝罪と名誉回復」「再発防止」であると述べた。最後に、有光氏は、法的責任の枠を超え、教育を通じた歴史認識と想像力の涵養、人間の安全保障を基盤とする国際的連帯の必要性を強調した。



中曽根弘文氏 国際IC推進議員連盟会長（元外務大臣、元文部大臣）

和解と信頼の架け橋の半世紀～次世代に繋げる平和への道～

中曽根弘文氏（国際IC推進議員連盟会長）は、国際IC日本協会設立50周年を祝し挨拶を述べた。父・中曽根康弘元首相が1950年にICの前身MRA国際会議に参加した経緯を紹介し、その際の経験が原爆記念碑の碑文「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」にもつながったと説明した。また、岸田首相がG7広島サミット前にこの経緯をG7首脳に伝えたことに言及した。

続いて、戦後の日韓和解におけるMRA/ICの貢献を具体的事例で示した。1957年のフィリピン会議で日韓の国会議員が初めて同席し、対話の端緒が開かれたこと。1962年の小田原でのMRA会合に参加した韓国の金鐘泌中央情報部長と大平正芳外相による「太平・金メモ」が合意され、1965年の日韓国交正常化の布石となったことを説明した。

さらに、李柱榮総裁ら韓国側の尽力に敬意を表し、自身の文部大臣時代に教育・文化・スポーツ交流や日中韓童話交流事業を推進した経験を述べた。最後に、分断が進む世界において、次世代の平和を担う若者の交流を支える活動の継続と、国際IC日本協会の一層の貢献を期待すると結んだ。



岡本あんな氏 共同通信グループNNA韓国編集記者・国際IC日本協会理事

韓国と私

岡本氏は、日本の大学を卒業後、韓国の大学院で修士号を取得し、日系経済メディアの韓国支局に勤務している。また、国際IC日本協会理事やMRA/IC韓国本部諮問委員として活動する。講演ではまず、韓国の若者の日本文化受容をテーマとする修士研究を紹介した。韓国人200人を対象とした調査結果から、日本のアニメや漫画は人気がある一方で、それが日本への好意と必ずしも一致しないことを述べた。

高校時代の交流キャンプや朝鮮学校訪問の経験を通じて、「誰かが代弁しなければならない声がある」と感じた経緯を語った。留学を決意した背景には、文化を自国の視点ではなく他国の視点から見直す意識があったと説明した。韓国での生活を通じて、日本と韓国が互いに都合のよい面だけを見ており、実務や日常の文化には大きな違いがあると述べた。

近年の韓国では日本文化の流行が拡大し、音楽やビール、カフェ文化まで広がっていると紹介した。一方で、若年層の男女対立や差別意識など社会課題も指摘した。最後に、日韓関係は特別なことではなく、互いを理解しようとする日常的な姿勢が重要であり、「知ることで許せる」という考え方が未来をより良くすると締めくくった。



佐々木淳氏 国際IC日本協会理事

静かな時間の令和アップデート

佐々木氏は、IofCに長年関わる人々に向け、「静かな時間」を現代に合わせて翻訳・更新する意図を説明した。氏はまず、令和の社会が100年前と比べて情報量が圧倒的に増加し、科学技術やDXの発展によって判断材料が過多になったと述べた。その中で「静けさ」は希少なリソースとなっており、日々の思考と行動を確かめるための「静かな時間」こそ必要だと示した。

続いて、「4つの絶対標準」（正直・純潔・無私・愛）の「絶対」の意味はキリスト教的な完全性を意味する「absolute」に由来し、人間が日々すべてを達成することは不可能であると説明した。その本質は「神の考えに背いていないか」という姿勢にあり、日本語では「お天道様に顔向けできるか」と表現できると述べた。

さらに、脳科学の観点から静かな時間の効果的な方法を紹介し、集中持続時間や実施時間帯による深さの違いを示した。令和の時代にはAIが「問い」を支える道具として機能し、自分の考えを言語化し整理する助けになると説明した。AIとの対話は思考の偏りや不足を可視化する機会にもなり、問いの質が答えの質を決定することを指摘した。

最後に、Society5.0の人間中心社会に触れ、AIは人を置き換えるのではなく「人らしさ」を強化する存在であると述べたうえで、「今日、明日の自分はお天道様に胸を張れるか」と問いを投げかけて締めくくった。

道畑 剛作氏 国際IC日本協会専務理事

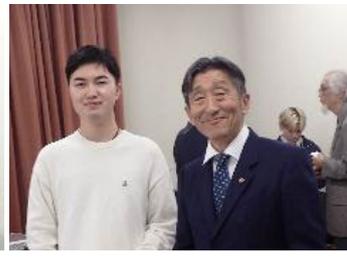
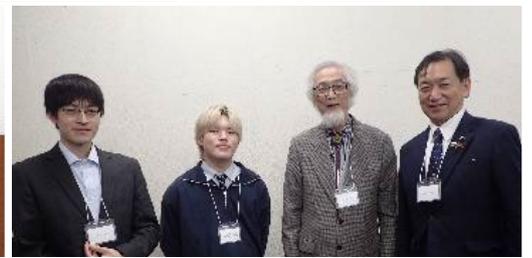
国際IC日本協会設立50周年祝賀会について

第47回IC国際フォーラムは、2025年10月下旬の二日間に亘り開催された。祝賀会は、第二日目のフォーラム終了後に、衆議院会館内の会場において、韓国MRA/IC李柱榮総裁ほか役員の方々、中曽根弘文国際IC推進議員連盟会長ほか関係議員の方々などのご参加を賜り、橋本徹名誉顧問、矢野弘典名誉会長ほか、役員全員を含む会員の参加のもと、国際IC推進議員連盟事務局長の森山浩行衆議院議員の司会により、盛大に開催された。会員の参加者は、協会の歴代会長を始めとする先輩会員がご尽力されてきた“和解と信頼の架け橋”への思いを新たにされた。

また、永年、当協会の活動を支えて下さっているMRAハウスから記念の生花を頂戴しました。ここに記して感謝申し上げます。



MRAハウスから贈って頂いた生花





発行者 公益社団法人 国際IC日本協会

〒106-0041 東京都港区麻布台2-2-1 龍岡会ビル1F

電話 070-1433-3693 E-mail info@iofc.jp

<https://www.iofc.jp/>

【一般財団法人MRAハウスからの助成金を頂いて実施されたものです。】